

僖公五年『左伝』「諺所謂輔車相依、唇亡齒寒」をめぐって

宇佐美 一博

はじめに

- 一 僖公五年『左伝』の文
- 二 「輔車相依」関係の用例の検討
- 三 「唇亡齒寒」関係の用例の検討
おわりに

はじめに

現在日本で使われている諺に「唇齒輔車」「輔車唇齒」「唇亡びて齒寒し」「輔車相依る」というものがある。⁽¹⁾同じ意味で中国では「唇齒相依」「唇亡齒寒」「輔車相依」が使われる。⁽²⁾「唇齒輔車」「輔車唇齒」は日本独特の言い方であるが、「唇亡齒寒」と「輔車相依」という二つの諺を合成したものである。二つの諺はいずれも関係が密

僖公五年『左伝』「諺所謂輔車相依、唇亡齒寒」をめぐって

接で互いに助け合う二つのものを譬えるという点で共通している。

僖公五年『春秋左氏伝』（以後『左伝』と略称）の文はおそらくこの点に着目し並列したものと考えられる。「諺に」とあるので、この『左伝』の文が出来上がった時にはすでに社会でよく知られており、また「所謂」という言葉から、必ず当時出典となる資料が存在したこともわかる。二つの同じ意味の諺を並列している文献は『左伝』以外には見当たらない。⁽³⁾

本稿では戦国時代から後漢時代までの間においてこの二つの諺がどのように用いられたのか、なぜ二つの諺を並列したのかをそれぞれ検討し、『左伝』のこの文がいつ頃成立したのか考えてみたい。『左伝』の成書時期を推測する一つの手がかりになるであろう。

一 僖公五年『左伝』の文

まず二つの諺が出てくる僖公五年『左伝』の前半部分を見てみよう。後半部分は「おわりに」のところと触れることにしたい。

晋侯復た道を虞に仮り以て虢を伐つ。宮之奇諫めて曰はく、虢は虞の表なり。虢亡べば、虞必ず之に従はん。晋は啓くべからず。寇は翫ぶべからず。一たびも之れ甚しと謂(な)す。其れ再びすべけんや。諺に所謂輔車相依り、唇亡ぶれば齒寒しとは、虞虢の謂ひなり、と。

晋侯復た假道於虞以伐虢。宮之奇諫曰、虢、虞之表也。虢亡、虞必従之。晋不可啓。寇不可翫。一之謂甚。其可再乎。諺所謂輔車相依、唇亡齒寒者、虞虢之謂也。

二つの諺は、春秋時代の虞という国の忠臣といわれた宮之奇が君主である虞公を諫めた言葉の中で用いられている。そして関係が密接で切り離せないとされているのは、虞と虢の二国である。

晋侯は虞に道をかりて虢を伐とうとしたが、宮之奇は、晋に道をかすことに反対した。道をかして晋が虢を伐てば、次は必ず虞を伐つにちがいないからである。むしろ虞は虢と密接な関係を保ち、お互いに助け合つていく方が得策だと考えたのである。

この『左伝』の文は、『春秋』の経「楚人 弦(国名)を滅ぼす。

弦子 黄(国名)に奔る」の後ろに置かれている。おそらく経に「冬、晋人 虞公を執ふ」があるので、その前の個所に挿入されたものと思われる。

二 「輔車相依」関係の用例の検討

宮之奇の言葉に出てくる「輔車相依」に関係のある用例を検討していくことにする。

① 『韓非子』十過篇

宮之奇諫めて曰はく、許すべからず。夫れ虞の虢有るや、車の輔有るが如し。輔は車に依り、車も亦輔に依る。虞虢の勢正に是なり。若し之に道を仮さば、則ち虢朝に亡びて、虞夕に之に従はん。不可なり。願はくは許す勿れ、と。虞公聴かず。遂に之に道を仮す。荀息虢を伐つ。而して還反す。処ること三年、兵を興し、虞を伐つ。又之に尅つ。

宮之奇諫曰、不可許。夫虞之有虢也、如車之有輔。輔依車、車亦依輔。虞虢之勢正是也。若假之道、則虢朝亡而虞夕従之矣。不可。願勿許。虞公弗聽。遂假之道。荀息伐虢。而還反。處三年、興兵伐虞。又尅之。

『左伝』と違うのは、「輔車相依」が「如車之有輔。輔依車、車亦依輔」となっていること、「唇亡齒寒」がないこと、そして晋の重臣

である荀息の名が見えていることである。

以上でとりわけ注目すべきことは、「如車之有輔。輔依車、車亦依輔」が、「輔車相依」という四字熟語が成立する前の段階を示しているという点である。ここでは「輔」と「車」は車に譬えを取つていふか思えないが、そうではなく身体に譬えを取つたという説も出てくるので、ここで日本江戸時代の『韓非子翼註』の著者である太田方（一七五九—一八二九）の意見を紹介しておこう。

輔は兩傍の車を夾む木なり。今人の杖を輻に縛り以て車を防輔するが如きなり。呂氏春秋、高誘注、車は牙なり。輔は頰なり、と。左伝云う、輔車相依る、と。杜注、輔は牙車なり、と。蓋し二子前に於て臂亡齒寒の語有るに泥みて此の説を為す。然れども是に非ざるなり。

輔、兩傍夾車木也。如今人縛杖於輻以防輔車也。呂氏春秋、高誘注、車、牙也。輔、頰也。左傳云、輔車相依。杜注、輔、牙車也。蓋二子泥於前有臂亡齒寒之語而爲此說矣。然非是也。

とあり、「輔」を車の兩傍につける板と解釈し、「輔」をほお骨、「車」を齒ぐきと解釈する説に反対する。

② ①で太田方が言う『呂氏春秋』權勳篇

獻公之を許し、乃ち荀息をして屈産の乗を以て庭実と爲し、而して加ふるに垂棘の璧を以てし、以て道を虞に仮りて虢を伐たしむ。虞公宝と馬を濫（むさば）りて之を許さんと欲す。宮之

奇諫めて曰はく、許すべからざるなり。虞と虢や、車の輔有るが若きなり。車は輔に依り、輔も亦車に依る。虞虢の勢是れなり。先人言有りて曰はく、臂竭きて齒寒し、と。夫れ虢の亡びざるや虞を恃み、虞の亡びざるも亦虢を恃むなり。若し之に道を仮さば、則ち虢朝に亡びて虞夕に之に従はん。奈何ぞ其れ之に道を仮さんや、と。虞公聽かずして之に道を仮す。荀息 虢を伐ち、之に克つ。還反し虞を伐ち、又之に克つ。荀息璧を操り馬を牽きて報ず。獻公喜びて曰はく、璧は則ち猶ほ是くのごときなり。馬の齒も亦薄（いささか）長ず、と。故に曰はく、小利は大利を之れ残ふなり、と。

獻公許之、乃使荀息以屈産之乗爲庭實、而加以垂棘之璧、以假道於虞而伐虢。虞公濫於寶與馬而欲許之。宮之奇諫曰、不可許也。虞之與虢也若車之有輔也。車依輔、輔亦依車。虞虢之勢是也。先人有言曰、臂竭而齒寒。夫虢之亡也恃虞、虞之亡也亦恃虢也。若假之道、則虢朝亡而虞夕從之矣。奈何其假之道也。虞公弗聽而假之道。荀息伐虢、克之。還反伐虞、又克之。荀息操璧牽馬而報。獻公喜曰、璧則猶是也。馬齒亦薄長矣。故曰、小利大利之殘也。

後漢の高誘の注は、車は牙なり。輔は頰なり。車輔相依憑す。近きを以て喻ふるを得るなり。

車、牙也。輔、頰也。車輔相依憑。得以近喻也。

と述べ、「齒ぐき」「ほお」と解釈している。しかし、ここは①の太田方の注に従って、「輔」は、車の添え木と解釈すべきであろう。

この『呂氏春秋』の文には、『韓非子』十過篇の文と比べて注目すべき点の一つある。『左伝』の「輔車相依」が「虞之与虢也若車之有輔也。車依輔、輔亦依車」となっているのはほぼ同じであるが、「唇亡齒寒」の前段階である「唇竭而齒寒」も「先人有言」として、すなわち別の諺として宮之奇が引用していることである。

③ 『淮南子』人間訓篇

晋の献公道を虞に仮り以て虢を伐たんと欲し、虞に垂棘の璧と屈産の乗とを遺る。虞公璧と馬とに惑ひて之に道を与へんと欲す。宮之奇諫めて曰はく、不可。夫れ虞と虢とは、車の輪有るが若し。輪は車に依り、車も亦輪に依る。虞と虢とは相恃みて勢あるなり。若し之に道を仮せば、虢朝に亡びて虞夕に之に従はん、と。虞公聴かず、遂に之に道を仮す。荀息虢を伐ち、遂に之に克ち、還反して虞を伐ち、又之を抜く。此れ所謂之に与へて反つて取る者なり。

晋獻公欲假道於虞以伐虢、遺虞垂棘之璧與屈産之乘。虞公惑於璧與馬而欲與之道。宮之奇諫曰、不可。夫虞之與虢、若車之有輪。輪依於車、車亦依輪。虞之與虢相恃而勢也。若假之道、虢朝亡而虞夕從之矣。虞公弗聽、遂假之道。荀息伐虢、遂克之、

還反伐虞、又拔之。此所謂與之而反取者也。

また同篇の別の箇所に見える。

張孟談曰はく、亡びんとするに存すること能はず、危きに安んずること能はずんば、智士を貴ぶことを為す無し。臣請ふ、試に潜行して、韓魏の君に見えて之を約せん、と。乃ち韓魏の君に見えて之に説きて曰はく、臣之を聞く、唇亡ぶれば齒寒し、と。今智伯二君を率いて趙を伐つ。趙將に亡びんとす。趙亡べば則ち二君之が次為らん。今に及びて之を凶らずんば、禍將に二君に及ばんとす、と。

張孟談曰、亡不能存、危不能安、無爲貴智士。臣請試潛行、見韓魏之君而約之。乃見韓魏之君、説之曰、臣聞之、唇亡而齒寒。今智伯率二君而伐趙。趙將亡矣。趙亡、則君爲之次矣。不及今而圖之、禍將及二君。

「輔車相依」は『韓非子』『呂氏春秋』と同じく「夫虞之与虢、若車之有輪。輪依於車、車亦依輪」となっていて、宮之奇の言葉の中に引かれているが、「輔」が「輪」の字になっている。「輪」であれば車のことであることは明らかである。しかし「唇亡而齒寒」の方は宮之奇の言葉ではなく、張孟談が趙襄子に言った言葉の中に見られる。

④ 『説文解字』十四上

輔、春秋伝に曰はく、輔車相依る、と。車に从ひ、甫の声。人

の頰車なり。

輔、春秋傳曰、輔車相依。从車甫聲。人頰車也。

『左伝』の「輔車相依」が引かれている。「輔」を人のほお骨として⁵⁾いる。

以上から考えると、「輔車相依」はもともと車の添え木と車から出た諺と考えられる。そして先の僖公五年『左伝』の文と『韓非子』『呂氏春秋』『淮南子』の文とを比べてみると、『左伝』の文は『韓非子』『呂氏春秋』『淮南子』の文を踏まえて書かれたと考えざるをえない。もしそうだとすると、『左伝』のこの部分は『淮南子』以降『説文解字』以前に書かれたものといえよう。

それでは「輔車」の意味について、「輔」は、ほお骨、「車」は、歯ぐきの意とする説について触れておこう。『易』咸卦上六の「其の輔頰舌に咸す（しゃべりたくて、上あご、頰、舌をむずむず動かす）」や、『詩経』衛風「巧笑倩たり」の毛伝「好き口輔（にっこり笑った口もと）」など、「輔」をほお骨、上あごとする用例がすでに存在していたこともあるが、「輔車」で、「輔」をほお骨、「車」を歯ぐきと解釈するようになったのは、太田方・段玉裁が指摘したように、僖公五年『左伝』の文が「輔車相依」を「唇亡齒寒」と並べて挙げているので、その影響でそれぞれ顔のほお骨、歯ぐきと解釈するようになったと考えるのが妥当であろう。

後漢時代の辞書、劉熙『釈名』（釈形体）に次のようにある。

輔車、其の骨強く、口を輔持する所以なり。或ひは曰はく、牙

車、と。牙の載る所なり。或ひは曰はく、頰、と。頰は含なり。

口は物を含むの車なり。或ひは曰はく、頰車、と。亦物を載する所以なり。或ひは曰はく、謙車、と。謙鼠の食、頰に積む。

人の食ふや之に似る。故に名を取るなり。

輔車、其骨強、所以輔持口也。或曰、牙車。牙所載也。或曰、頰

頰含也。口、含物之車也。或曰、頰車。亦所以載物也。或曰、

謙車。謙鼠之食、積於頰。人食似之。故取名也。

辞書というものはその時代でもっとも広く多くの人々に受け入れられている解釈を採用するのが普通である。このことよって「輔車」をほお骨・歯ぐきとするのは、後漢時代においてはごく一般的な解釈だったことがわかる。後漢の高誘はすでに見たように、『呂氏春秋』の注で「輔」は頰、「車」は牙と解している。晋の杜預も後漢以来の解釈に従って、『左伝』に「輔は頰輔、車は牙車」と注したのである。⁶⁾

三 「唇亡齒寒」関係の用例の検討

次に宮之奇の言葉に出てくる「唇亡齒寒」に關係のある用例を検討していくことにする。

① 『韓非子』 喻老篇

晋の猷公垂棘の璧を以て道を虞に仮りて競を伐たんとす。大夫宮之奇諫めて曰はく、不可なり。唇亡ぶれば齒寒し。虞競相救ふは、相徳するに非ざるなり。今日晋 競を滅す。明日虞必ず之に随ひて亡びん、と。虞君聴かず。其の璧を受けて之に道を仮す。晋已に競を取り、還反して虞を滅せり。此の二臣は、皆賤理に争うものなり。而るに二君用ひざるなり。然らば則ち叔瞻・宮之奇も亦虞鄭の扁鵲なり。而るに二君聴かず。故に鄭以て破れ、虞以て亡ぶ。故に曰はく、其れ安きは持ち易きなり。其れ未だ兆さざるは謀り易きなり、と。

晋猷公以垂棘之璧、假道於虞而伐競。大夫宮之奇諫曰、不可。唇亡而齒寒。虞競相救、非相徳也。今日晋滅競。明日虞必隨之亡。虞君不聽。受其璧而假之道。晋已取競、還反滅虞。此二臣者皆争於賤理者也。而二君不用也。然則叔瞻・宮之奇亦虞鄭之扁鵲也。而二君不聽。故鄭以破、虞以亡。故曰、其安易持也。其未兆易謀也。

宮之奇が虞公を諫めた言葉の中で引かれている。先の十過篇では、「如車之有輔。輔依車、車亦依輔」のみであったが、ここは「唇亡而齒寒」のみである。十過篇と喻老篇とを合わせ参考によれば、宮之奇が二つの諺を両方引用したとする考えも出てくる。先に見た『呂氏春秋』権勳篇は、こうした考えを基にして作られた説話かもしれ

ない。

② 哀公八年『左伝』

夫れ魯は、齊晋の脣、脣亡ぶれば齒寒し。君の知る所なり。夫魯、齊晋之脣、脣亡齒寒。君所知也。

宮之奇の言葉ではないが、『左伝』では「唇亡齒寒」という四字の諺が哀公八年にも見えているので紹介しておく。

③ 僖公二年『春秋公羊伝』（以後『公羊伝』と略称）

宮之奇果たして諫むるに、記に曰はく、脣亡ぶれば則ち齒寒し、と。虞郭の相救ふや、相賜ふを為すに非ず。則ち晋今日郭を取れば、而ち明日虞従ひて亡ぶのみ。君請ふ、許す勿れ、と。

宮之奇果諫、記曰、脣亡則齒寒。虞郭之相救、非相爲賜。則晋今日取郭、而明日虞従而亡爾。君請勿許也。

④ 僖公二年『春秋穀梁伝』（以後『穀梁伝』と略称）

宮之奇諫めて曰はく、語に曰はく、脣亡ぶれば則ち齒寒し、と。其れ斯の謂か、と。

宮之奇諫曰、語曰、脣亡則齒寒。其斯之謂與。

『唇亡則齒寒』のみである。「則」の字が入っている。

⑤ 『春秋繁露』王道篇

晋道を虞に仮り、虞公之を許す。宮之奇諫めて曰はく、脣亡ぶれば齒寒し。虞競の相救ふは、相賜ふに非ざるなり。君請ふ、許す勿れ、と。虞公聴かず。後虞果たして晋に亡ぼさる。春秋

此を明らかにす。存亡の道、観るべきなり。

晉假道虞、虞公許之。宮之奇諫曰、晉亡齒寒。虞虢之相救、非相賜也。君請勿許。虞公不聽。後虞果亡於晉（清・蘇輿の注に従い、「晉」を補う）。春秋明此。存亡道可觀也。

『春秋繁露』は前漢・董仲舒の著書である。『左伝』と同じ四字の「晉亡齒寒」という諺がはじめて見える。

⑥ 『史記』 晋世家

虞と虢、晉と齒なり。晉亡ぶれば則ち齒寒し。虞公聽かず。遂に晉に許す。宮之奇其の族を以て虞を去る。其の冬、晉虢を滅ぼす。虢公醜 周に奔る。還り襲ひて虞を滅ぼし、虞公及び其の大夫井伯・百里奚を虜にす。

虞之與虢、晉之與齒。晉亡則齒寒。虞公不聽。遂許晉。宮之奇以其族去虞。其冬、晉滅虢。虢公醜奔周。還襲滅虞、虜虞公及其大夫井伯百里奚。

『公羊伝』『穀梁伝』と同じ「晉亡則齒寒」のみである。

⑦ 前漢・劉向の『新序』善謀篇

宮之奇諫めて曰はく、晉の使者、其の幣重く、其の辞卑し。必ず虞に便ならず。語に曰はく、晉亡ぶれば則ち齒寒し、と。故に虞虢の相救ふは、相賜ふを為すに非ざるなり。今日虢を亡ぼして明日虞を亡ぼさん、と。公聽かず。遂に其の幣を受けて之に道を借す。旋歸して四年、反つて虞を取る。荀息馬を牽き壁

を抱きて前みて曰はく、臣の謀如何、と。獻公曰はく、壁は則ち猶ほ是くのごとくにして、吾が馬の齒は長を加へり。晋の獻公荀息の謀を用いて虞を禽にす。虞 宮之奇の謀を用いずして亡ぶ。故に荀息は霸王の佐に非ず。戦国并兼の臣なり。宮之奇の若きは、則ち忠臣の謀と謂ふべきなり。

宮之奇諫曰、晉之使者、其幣重、其辭卑。必不便於虞。語曰、晉亡則齒寒矣。故虞虢之相救、非相為賜也。今日亡虢而明日亡虞矣。公不聽。遂受其幣而借之道。旋歸四年、反取虞。荀息牽馬抱壁而前曰、臣之謀如何。獻公曰、壁則猶是、而吾馬之齒加長矣。晉獻公用荀息之謀而禽虞。虞不用宮之奇謀而亡。故荀息非霸王之佐。戦国并兼之臣也。若宮之奇、則可謂忠臣之謀也。

二つの諺が引用されていた『呂氏春秋』權勳篇とほぼ同じ文章であるが、『新序』では「晉亡則齒寒」のみ引かれている。そしてもう一つ注目すべき点がある。『呂氏春秋』では小利を貪った虞公を非難しているが、『新序』では荀息を貶め、宮之奇を忠臣として高く評価していることである。これによって荀息と宮之奇の比較評価という問題があることがわかる。

以下に参考までに宮之奇の言葉以外の「晉亡齒寒」関係の用例を列挙しておく。これらを含めて考察してわかることは、後漢以前で四字の「晉亡齒寒」という諺が見られるのは『春秋繁露』王道篇、『焦氏易林』、僖公五年『左伝』のみだと言ふことである。他の用例では、

間に「則」や「而」の字が入ったり、「亡」が「竭」や「掲」の字になつていたりする。

・『墨子』非攻中篇

(智伯)又圍趙襄子於晉陽。及若此、則韓魏亦相從而謀曰、古者有語、唇亡則齒寒。趙氏朝亡、我夕從之。趙氏夕亡、我朝從之。

・『戦国策』齊策

蘇秦謂齊王曰、……且趙之於燕齊、隱蔽也。齒之有唇也、唇亡則齒寒。今日亡趙、則明日及齊楚矣。且夫救趙之務、宜若奉漏甕沃焦釜。夫救趙高義也。却秦兵顯名也。義救亡趙、威却強秦兵。不務爲此、而務愛粟、則爲國計者過矣。

・『戦国策』趙策

張孟談於是陰見韓魏之君曰、臣聞、唇亡則齒寒。今知伯帥二國之君伐趙、趙將亡矣。亡則二君爲之次矣。

・『戦国策』韓策

韓又令尚靳使秦。謂秦王曰、韓之於秦也、居爲隱蔽、出爲鴈行。今韓已病矣。秦師不下殺。臣聞之、唇掲者其齒寒。願大王之熟計之。宣太后曰、使者來者衆矣。獨尚子之言是。召尚子入。

・『韓非子』存韓篇

且臣聞之、唇亡則齒寒。夫秦韓不得無同憂。

・『韓非子』十過篇(『戦国策』趙策にも類似の文が見える)

張孟談見韓魏之君曰、臣聞、唇亡齒寒(『戦国策』「齒」の上に「則」字有り)。今知伯率二君而伐趙。趙將亡矣。趙亡則二君爲之次。

・『莊子』胠篋篇

故曰、唇竭則齒寒。

・『文子』上德篇

川竭而谷虛、丘夷而淵塞、唇亡而齒寒、河水深而壤在山、

・『焦氏易林』

遯 唇亡齒寒、積日凌根、朽不可用、爲身災患。

・『淮南子』説林篇

川竭而谷虛、丘夷而淵塞、唇竭而齒寒、河水之深、其壤在山、

・『塩鉄論』誅秦篇

大夫曰、……唇亡則齒寒。支體傷而心慄慄。

・『説苑』談叢篇

唇亡而齒寒。河水崩、其懷(壞に通ず)在山。

・『潜夫論』救辺篇

唇亡齒寒、體傷心痛、必然之事。

おわりに

僖公五年『左伝』に見える宮之奇の言葉に出てくる二つの諺の成

立過程について本稿で考察したことをまとめると以下のような
る。

○「輔車相依」関係

『韓非子』十過篇

「夫虞之有虢也、若車之有輔。輔依車、車亦依輔」

『呂氏春秋』權勳篇

「虞之与虢也、若車之有輔也。車依輔、輔亦依車」

『淮南子』人間訓篇

「夫虞之与虢、若車之有輪。輪依於車、車亦依輪」

○「唇亡齒寒」関係

『韓非子』喻老篇

「唇亡而齒寒」

『呂氏春秋』權勳篇

「唇竭而齒寒」

僖公二年『公羊伝』

「唇亡則齒寒」

僖公二年『穀梁伝』

「唇亡則齒寒」

『春秋繁露』王道篇

「唇亡齒寒」

『史記』晋世家

僖公五年『左伝』「諺所謂輔車相依、唇亡齒寒」をめぐって

「唇亡則齒寒」

『新序』善謀篇

「唇亡則齒寒」

『左伝』——「輔車相依」「唇亡齒寒」

『說文解字』十四上

「輔車相依」

『潜夫論』

「唇亡齒寒」

四字の「輔車相依」という諺が文献に初めて登場したのは、僖公五年『左伝』である。『韓非子』十過篇、『呂氏春秋』權勳篇、『淮南子』人間訓では、最終的に「輔車相依」になる前の段階を示すもので、十八字にも及ぶ文であった。そしてもとは虞と虢の関係を車に譬えを取ってその緊密さを説いたものである。

また四字の「唇亡齒寒」は、僖公五年『左伝』のほか『春秋繁露』王道篇、『焦氏易林』にも見え、ほぼ前漢武帝の時代には成立していた。他の文献では、間に「則」や「而」の字が入ったり、「亡」が「竭」や「揭」の字になったりしている。

「輔車相依」はもともと車に譬えを取ったものであったが、『左伝』

の文が「唇亡齒寒」と並列するに至って、「輔」をほお骨、「車」を齒ぐきとする解釈が出てきた。後漢時代では劉熙の『釈名』という辞書に採用されるほど一般的な解釈になった。後漢の高誘の『呂氏春秋』注、服虔の『左伝』注、晋の杜預の『左伝』注もその解釈に従ったのである。⁽⁸⁾

それでは僖公五年『左伝』のこの文はいつ頃成立したのか。

前漢武帝以降であることは確実で、前漢末に古文学が興隆する時期に出来たのではないかと推測される。前漢時代には經学の今文学と古文学の争いがあり、武帝の時五經博士が置かれた時、学官に立てられたのはすべて今文学であった。ところが前漢末劉歆は古文学をよしとし、今文学派の学者とはげしく論争した。そして王莽の新的時その信任を受け、はじめて古文の学問はその地位を確立した。この中に『左伝』がある。『新序』は劉歆の父劉向の編であるが、善謀篇には「唇亡齒寒」のみで、「輔車相依」が見当たらないところを見ると、やはり劉歆の時かと思われる。『左伝』の成書時期はこの時期とする説があるが、僖公五年のこの諺の個所は、ささやかではあるが具体的な一つの証拠であるといえよう。今古文学の論争では劉歆が『左伝』を偽作したかどうかといったことが問題となるが、これはまた別の問題である。⁽⁹⁾

ところで、なぜ同じ意味の諺を二つも並列したのであろうか。

そもそも諺を引くのは、自分の主張に説得力を持たせるためであ

る。もう一つ加えるのはさらに説得力を増そうとするからであろう。『左伝』は、宮之奇が虞公に説いた言葉に説得力をもたせたかったのである。これは『左伝』が宮之奇を高く評価しようとする事と関係があるのではないだろうか。ここで『左伝』の後半部分を見ると、そのことがよく分かる。他の文献では宮之奇と比較される人物として必ず晋の荀息が登場する。しかし『左伝』では荀息はまったく登場せず無視され、もっぱら虞の側の忠臣宮之奇にスポットライトが当てられ、晋からの宝石と名馬に目がくらんだ貪欲で愚鈍な虞公に対して、もし晋に道をかせば次は虞が滅ぼされることを懇々とさとす宮之奇の姿が描かれている。結局虞公に聞き入れられず、宮之奇は虞は歳末までもつまみという言葉を残して、一族を引き連れて虞を去って行くのである。

ところで、宮之奇を高く評価する背後に、先に触れた今文学と古文学の論争が関係していることを忘れてはいけない。今文学で『春秋』と言えば、『公羊伝』と『穀梁伝』である。『公羊伝』、『穀梁伝』では、宮之奇ではなく晋の側の荀息を高く評価している。宮之奇の人となりについてはどちらも一定の評価はするが欠点も指摘している。⁽¹⁰⁾『左伝』は『公羊伝』、『穀梁伝』に対抗するために荀息を無視し、宮之奇を見識ある優れた人物として高く評価したのである。諺も『公羊伝』、『穀梁伝』の宮之奇の言葉には「唇亡則齒寒」だけしか見えていないので、そのことを意識して同じ意味の諺を二つ並列するとい

う前例のないやり方で宮之奇の言葉の説得性を高めようとしたのではないかと考へる。

注

(1) 参考までに代表的な辞典の記述を紹介しておく。

○『日本国語大辞典』(第二版、小学館、二〇〇一)

「唇齒輔車」―「春秋左伝―僖公五年」の「諺所謂輔車相依、唇亡齒寒者、其虞號之謂也」による語。「輔」は頰骨、「車」は歯ぐきの意。一方がほろべば他方も立ちゆかなくなるような、利害が密接で離れられない関係をたとえていう語。もちつもたれつとの関係。*義経仁義主汗(288)〔福地校痴〕八「故なくして国土を広め妄りに他国を攻亡さん存意なし、取分け貴国は唇齒輔車(シンシホシヤ)の隣国なり、争(いか)で一点の望をば義経貴国に懸け申すべき」*社会百面相(1902)〔内田魯庵〕矮人巨人・二「公等と我とは同文同人種の同胞である。唇齒輔車(シンシホシヤ)の関係である」

▽「唇亡びて齒寒し」「唇竭きて」「無ければ」「齒寒し」「輔車唇齒」「輔車相依る」も載せている。

○『広辞苑』(第七版、岩波書店、二〇一八)

「唇齒輔車」―左伝(僖公五年)「諺に所謂、輔車相依り、唇亡びて齒寒し」(「輔」は車の添木の意。一説に、「輔」がほお骨、「車」が歯ぐきの意とも)相互が密接に助け合い、一方が亡びれば他方も危うくなるような関係のたとえ。

▽「唇亡びて齒寒し」「輔車相依る」も載せている。

○松村明監修『大辞泉』(小学館、一九九八)

「唇齒輔車」―『春秋左氏伝』僖公五年の「諺に所謂、輔車相依り、唇亡びれば齒寒しとは」から「一方が減れば他方も成り立たなくなるような密接不離の関係にあつて、互いに支え助け合つて存在していることのとえ。

僖公五年「左伝」「諺所謂輔車相依、唇亡齒寒」をめぐって

▽「唇亡びて齒寒し」「輔車相依る」も載せている。

○山田俊雄・築島裕・小林芳規・白藤禮幸『新潮国語辞典』(第二版、平成七年)

「唇齒輔車」―「左伝」「諺所謂輔車相依、唇亡齒寒」による。「輔」は車のそえ木。一説に「輔」はほおの骨、「車」はあごの意。利害関係が密接で、互いに助け合い、ささえ合っているような関係。

▽「唇亡びて齒寒し」「唇竭きて齒寒し」「輔車相依る」も載せている。

○西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫『岩波国語辞典』(二〇〇五)

「唇齒輔車」―くちびると歯との関係のように互いの利害が密接で一方が減れば他方も立ちゆかないこと。「輔」はほお骨、「車」は歯ぐきの意。

○北原保雄編『明鏡国語辞典』(大修館書店、二〇〇六)

「唇齒輔車」―互いに助け合つて成り立つ間柄のたとえ。また、利害関係の密接なことのたとえ。「輔車」は、車輪の添え木と車輪とも、ほお骨と下あごとも解されるが、「唇齒」と同じく互いに助け合う二つのもの意。

○見坊豪紀他篇『三省堂国語辞典』(二〇一四)

「唇齒輔車」―「くちびると歯、ほお骨と歯ぐきの間がらのように」利害関係が密接で、たがいに助け合っていくこと。

(2) 現在刊行されている中日辞典では、「唇齒相依」「唇亡齒寒」はいずれの辞典にも取られているが、「輔車相依」を載せているものは少ない。

(3) 「左伝」には、僖公五年以外にも「諺所謂」や「諺曰」などが見える。「左伝」が成立するに当たっては諺に着目された可能性があり、今後同じような検討をする必要がある。

- ・周諺有之、曰、山有木、工則度之、實有禮、主則擇之。―隠公十一年
- ・曰、周諺有之、匹夫無罪、懷璧其罪。―桓公十年
- ・且諺曰、心苟无瑕、何恤乎無家。―閔公元年
- ・諺所謂輔車相依、唇亡齒寒者、其虞號之謂也。―僖公五年
- ・諺有之曰、心則不競、何憚於病。―僖公七年
- ・此諺所謂庇焉而縱尋斧焉者也。―文公七年
- ・諺曰、狼子野心。―宣公四年
- ・古人有言、曰、雖鞭之長、不及馬腹。―宣公十五年

- ・ 諺曰、高下在心。―宣公十五年
- ・ 諺曰、民之多幸、國之不幸也。―宣公十六年
- ・ 曰、諺所謂老將知而耄及之者、其趙孟之謂乎。―昭公元年
- ・ 且諺曰、非宅是卜、唯鄰是卜。―昭公三年
- ・ 抑諺曰、蓺爾國。―昭公七年
- ・ 諺曰、臣一主二。―昭公十三年
- ・ 諺曰、無過亂門。―昭公十九年
- ・ 諺所謂室於怒、市於色者、楚之謂矣。―昭公十九年
- ・ 諺曰、唯食忘憂。―昭公二十八年
- ・ 諺曰、民保於信。―定公十四年
- (4) 清の段玉裁(一七三五―一八一五)は『説文解字注』で、「輔」を「蓋し今人の杖を輻に縛り以て車を防輔するが如きなり(蓋如今人縛杖於輻以防輔車也)」と説き、添え木だとしている。そして多くの『左伝』に注する者が「輔」をほお骨、「車」を歯ぐきと解釈するのは、「乃ち下文の唇齒に因りて傳会するのみ。固より許説の善に若かざるなり(乃因下文之唇齒而傳会耳。固不若許説之善也)」と、太田方と同じ考えを述べている。太田方と段玉裁は国こそ違え、同時期に同じ説を唱えたのである。
- 竹添井井(一八四一―一九一七)も『左氏会箋』で、「輔車相依、唇亡齒寒」は別々の二つの諺を合わせ引いたもので、「輔車相依」は車に譬えをとつたもので、「輔」は車の両側にある車上の荷物を夾むための木とする。ほお骨、あごとするのは、仮借で本来の意味ではないと述べている。なおこの説は、亀井昭陽『左伝續考』と同じである。竹添は『續考』を直接援用したり、数多く盗用もしているの、ここも『續考』に依拠していると考えられる。『續考』の自筆本は読みづらいが、『詩経』小雅、正月「無棄爾輔、員于爾輻」と『呂氏春秋』權勳篇によって「亦不以類輔、二句各一事」と述べ、車に譬えを取つたもので、「唇齒」とは関係ないという。『亀井南冥・昭陽全集』全八卷(葦書房、一九七八)所収『左伝續考』及び岡村繁氏の解説を参照。
- 白川静『字統』(平凡社、一九八四年初版)も「輔」はもと車とそえ木の意で、上顎を輔、下顎を車とするのは、鑿説であると言っている。
- (5) 「輔、春秋伝曰、輔車相依。从車甫声。人類車也」の「人類車也」について、小徐本にはこの四字があるが、清の段玉裁は、注(4)でみたように、「左伝」の「輔」は車の添え木であると解し、「人のほお骨」では前後文章が通じないので、「宜しく四字を刪去すべし」と言っている(『説文解字注』)。しかし後漢時代の「輔」の解釈は本稿で明らかにしたとおり「ほお骨」と解するのが一般的であった。許慎も字書編纂に当たってその時代の優勢な説に従ったと考えれば、削る必要はないと考える。
- (6) 顧炎武も『左伝杜解補正』で、杜預の注が『呂氏春秋』高誘の注と同じであること、「牙車」は「素問」(刺熱篇、氣府論篇)が出典であり、解釈はその影響を受けていることを指摘している。
- 輔車相依る、唇亡ぶれば齒寒し。此の二句一意、乃ち是れ諺語。呂氏春秋、宮之奇諫めて曰はく、虞の號有るや、車の輔有るが若きなり。車は輔に依り、輔も亦車に依る。虞號の勢是れなり。注、車は牙なり。輔は頰なり。杜氏と同じ。牙車の字素問に出づ。
- 輔車相依、唇亡齒寒。此二句一意、乃是諺語。呂氏春秋、宮之奇諫曰、虞之有號也、若車之有輔也。車依輔、輔亦依車。虞號之勢是也。注、車、牙也。輔、頰也。與杜氏同。牙車字出素問。
- (7) 『韓非子』十過篇に「唇亡齒寒」が見えているが、類似の文が『戦国策』趙策に「唇亡則齒寒」とあり、「則」字が脱落した可能性がある。
- (8) 服虔の注は、『詩経』衛風・碩人の疏に見える(清・王謨輯『漢魏遺書鈔』参照)。
- 『左伝』の唐・孔穎達疏、宋・林堯叟附注いずれも杜預の注を踏まえた解釈をしている。これに対し『左伝』の注で「輔車」を車に譬えを取つたものだとするのは、清・劉文淇の『春秋左氏伝旧注疏証』である。本稿と重なる資料、清朝の学者、とくに注(4)・(5)の段玉裁の説を引用して強く主張する。ただ「輔車」の解釈のみで、『左伝』「輔車相依、唇亡齒寒」の成立過程、『左伝』のこの部分の成書時期に関しては全く触れていない。また、宮之奇と荀息をめぐる『公羊伝』「穀梁伝」との関係についても全く言及していない。
- (9) 『漢書』楚元王伝第六にみえる劉歆伝によると、劉歆は前漢末哀帝のとき、宮中秘蔵の書籍を調査して古文の『左伝』を発見し、伝を「春

秋」経と照応するよう編成したとされる。

(10) 晋が虞に道をかちたのは二回ある。『左伝』は二回目(僖公五年)のところに伝があるが、『公羊伝』と『穀梁伝』は一回目の経「虞師晋師滅夏陽(僖公二年)」のところに置かれている。そこでは、晋の方に焦点が当てられ、荀息の虞を亡ぼす方策を高く評価している。宮之奇については、『公羊伝』では荀息が猷公に次のように述べている。

荀息曰はく、宮之奇、知なるは則ち知なり。然りと雖も虞公貪にして宝を好む。宝を見れば必ず其の言に従はず。請ふ、終に以て往かん、と。荀息曰、宮之奇、知則知矣。雖然、虞公貪而好寶。見寶必不從其言。請終以往。

知恵のあることは一応認めているが、虞公の貪欲さを押しとどめる力はないと見ている。『穀梁伝』も、晋の方に焦点を当て、荀息の方策を高く評価している。宮之奇については、

荀息曰はく、宮之奇の人と為りや、達心にして懦。又少しく君より長ず。達心なれば、其の言略なり。懦なれば則ち強く諫むる能はず。少しく君より長ずれば、則ち君之を軽んず。且つ夫れ玩好、耳目の前に在りて、患、一國の後に在り。此れ中知以上乃ち能く之を慮ばかる。臣料るに、虞君は中知以下なり、と。

荀息曰、宮之奇爲人も、達心而懦。又少長于君。達心則其言略。懦則不能彊諫。少長于君則君輕之。且夫玩好在耳目之前、而患在一國之後。此中知以上、乃能慮之。臣料、虞君、中知以下也。

明達ではあるが、臆病なので、中知以下の愚鈍な虞公に理解できるような話をするのができないし、強く諫めることもできない。また年も少し上だけなので、虞公は宮之奇を軽んじるであろうと述べている。